

「令和の日本型学校教育」推進のためのリスト

愛知県立千種聾学校 Ver.1 (2025.10.31)

基本的な考え方	主役	どんな時も「子ども主体」「主役は一人一人の子ども」を心掛ける。
		学習の主導権を教師から「子ども」へ委ねる。（教師主導から脱却）
		教師主導の一斉授業から子ども主体の授業（探究的な学び）へとシフトする。
		低→中→高学年と子どもにやり方を委ねる時間・内容を増やす。
		「中心が教師／教師がずっと話している／子どもはすわっているだけ」にしない。
		子どもの主体的な学びを支援する「伴走者」としての立場を意識する。
		指導案の流れに当てはめようとせず、教師主導の型にはまった授業にしない。
	考える力	子どもが考える前に教師が答えを言わない。
		教師の発問によって一つの答えを誘導したり押し付けたりしない。
		子どもに「正解」だけを求めない。
		「子どもの数だけ考え方・答えがある」ことを認識する。
		子どもが分からないことがあっても、自分で考えたり調べたりするようにする。
		正誤に関わらず答えにたどり着くまでの「考える活動」「思考過程」を大切にする。
		子どもが自分の考えを深め、生活や将来に役立つ思考力へとつなげる。
	学び方	子どもの「探究的な学び」を意識し、推し進める。
		子どもが「学び方を学ぶ」ようにし、「学びに向かう力」を涵養する。
		「社会に出てからも自分で学び続けられる人」に育つよう支援する。
		子どもが学び方を理解し「探究的な学び」が進んでいる場合、教師は見守るだけとなる。
		「探究的な学び」が定着することで、教師主導型の授業よりも子どもの学びが増える。
		「探究的な学び」が定着することで、子どもも教師も「真に楽しい授業」となる。
	プレアンナントシッ プ	「失敗させない支援」から「つまずきの中から学ぶ支援」へシフトする。
		失敗をチャンスととらえ、失敗から一緒に考え、学ぶ場へと好転させる。
		子どもが自ら課題を見付け、解決に向けて失敗しながら取り組む姿を後押しする。
		子どもが疑問をもち、考えて解決し、表現する場面を教師が意図的に設計する。
		親切すぎることで学びの機会が奪われることを認識する。
	スキル	何を学んだかが分かる板書から学びの手順・進め方が分かる板書へシフトする。
		「学びの記録」（構造的な板書）から「学びの地図」へ変換を図る。
		授業のはじめに本時（単元）の流れや結論を示してから、主体を子どもに移す。
		低→中→高学年と一斉指導の時間を減少させることを意識する。
		一斉指導で教師が説明や解説をし過ぎない。
		子どもにとって意味のない不自然な学習の流れにしない。
		「なぜこの方法なのか」「何のためにやっているのか」を子どもと教師で共有する。
		子どもの実態や単元に応じて、ICTとアナログを使い分ける。
		子どもの実態や単元に応じて、一斉指導と複数動線型の授業を使い分ける。
		ICTの利活用により、個別最適な学びも協働的な学びも進めやすくなる。
		個別最適な学びと協働的な学びを同時進行に進めることができる。

ラッ木ー



個別最適な学び	基本姿勢	一斉指導（画一的な指導）から複数動線型指導へシフトする。
		支援が必要な子どもに適切なタイミングで支援する。
		支援が必要な子どもに支援し過ぎない。どの子どもにも考える場をつくる。
		選択肢を提示して、子どもに決定権を委ねる。
		学び方を知っている子どもが、学びの自己選択・自己決定をするように後押しする。
		子どもが自分で学び取っていく（教師が「学びを委ねていく」）ことを意識する。
		子どもに学習の主導権を少しずつ渡していく。
		どの子どもも、待ち続けたり退屈したりしないようにする。
		どの子どもも「知りたい」と感じ、モチベーションを高められる工夫をする。
		探究のプロセス自体を子どもが進められるように高い目標を意識する。
	最適な課題	子どもに最適な課題と「考える活動」を設ける。
		B課題（標準到達が目標）、A課題（標準）、S課題（標準を超えた目標）など、段階的な課題を用意することで、子どもが自己選択できる場面をつくる。

協働的な学び	雰囲気	子ども全員の意見を全体場で共有する。
		子どもが自由に考え、意見を述べる場面や雰囲気がある。
		子どもが言った意見を否定しない雰囲気がある。教師がいつも認め、褒めている。
		子どもの意外性や柔軟なアイデアを信じ、引き出す工夫をする。
		教師が「こうあらねばならない」を押し付けない。
		多様性を認め「いろいろな考え方があって当たり前」という雰囲気にする。
		子ども同士がお互いの考え方を認め合ったり尊重したりする雰囲気がある。
		子どもが他の子どもに自然と教え合える雰囲気がある。
	ファシリテーター	授業が脱線しかけたときに軌道修正できるよう言葉掛けをする。
		子どもと教師が、ゴールや進むべき方向をきちんと理解している。
		タイミングよく助言するなど、ファシリテーター役を担う。
	情報の収集	インターネットだけでなく教科書も貴重な情報源であることを思い出せるようにする。
		他の子どもの考えやインターネット等の情報と、自分の考えを照らし合わせる習慣がある。
		オンラインや交流校、教師や大人も協働的な学びの相手であることを意識する。
	思考の整理	思考スキルや思考ツールを活用し、考えを深めたり思考を整理したりする。
		「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」を意識する。
		「課題の設定」…どんな課題を設定するか
		「情報の収集」…どんな情報が必要か、どこから集めるか
		「整理・分析」…どう整理するか（思考ツールの活用）←探究的な学習のポイント 「まとめ・表現」…どうまとめて表現するか、どう振り返るか（認め合い分かり合う発表）

大前提	少人数学級や子どもの実態を理由に「令和の日本型学校教育」は無理だと決めつけない。
	成功体験や自信のある昔の指導法に縛られず、教師が受けた授業のイメージから脱却する。
	Unlearn（意図的に捨てる）して、一歩踏み出す勇気をもつ。
	最大のリスクは「変わらないこと」とであると理解し、アップデートの必要性を感じる。
	社会が求める力（子どもが付けるべき力）が変化していることを認識する。